

混乱の中から立ち上がる

石川勝四郎社長は、昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦を千住工場事務所で迎えた。ラジオから聞こえる終戦の詔勅は十分聞きとれなかったけれど、悲惨な戦争がようやく終わったことが告げられた。「日本はどうなるのか」。このとき石川社長の胸の中を去来したのは、そんな感慨であった。

千住工場が無事であったことが何よりも幸いしたが、それにしても終戦からわずか二週間余の九月初めから生産を再開したことは、経済、社会ともに大混乱している中で、かなり早い立ち上がりであった。

もう一つ幸いなことは、鋼板など原材料の在庫が十分にあり、当分の間はそれでやっていけるめどがあった。

昭和二十四年（一九四九）九月二十五日、GHQ（連合国総司令部）は「トラックの製造は資材割当の枠内で月産千五百にかぎり許可するが、乗用車は禁止」の措置をとった。

しかし、自動車部品についていえば、民間の補修用はいわば枯渇状態にあっただけに、堰を切ったように売れた。当社のガasket、パッキンも部品の卸業者が、生産再開を待ちかねたように、現金をもつて、工場まで仕入れに押しかけてきた。製造が間に合わない、出来上がるのを待っているといった、本当に「飛ぶように売れる」有様であった。とにかく物不足で、「作れば売れる時代」であった。